

徒然草

ボルネオの熱帯雨林で難破した砕氷船を発見？

浅沼信爾

客員教授

一橋大学国際・公共政策大学院

2518年8月某日、パン・アジア・ニュース発「地球環境の変化を調査中の国際混成研究チームはボルネオ（カリマンタン）の熱帯雨林で20世紀前半に製造されたと推定される砕氷船の難破船を発見した。当時からの地球環境は大きく変化しているが、熱帯雨林の中になぜ砕氷船があったのかは大きな謎だ。」

もちろんこれはフェイクニュースだ。しかし、こんなことになったかも知れないことは1970年代のインドネシアで起こった。インドネシアの石油資源を独占していた国営石油公社プルトミナは、1973年の第一次オイルショックの結果インドネシアで唯一の強い財務基盤を持った国家組織となり、それこそ「国家の中の国家」となった。プルトミナの総裁であるストオ将軍はスハルト大統領の右腕と呼ばれ、石油収入をベースにインドネシアの経済発展に寄与するあらゆる分野のプロジェクトを手掛けていた。¹ 当然、世界中の有象無象からあらゆる種類のプロジェクト提案がストオ将軍に持ち込まれる。その中には大規模な国際的詐欺に近いプロジェクトや技術的に未完成のフィージビリティの怪しいプロジェクトも含まれている。

そのようなプロジェクトの一つが「ジプシー肥料工場」プロジェクトだった。インドネシアの天然ガス田は、当時既にスマトラとカリマンタンに大規模なガス田があり、ここでは輸出用の大規模LNGプラントがあった。しかし、それ以外の既に発見された天然ガス田は開発しても5年程度で枯渇するような小規模のものが多く、LNGプラント建設は経済性が無かった。そこで考えられたのが「ジプシー肥料工場」だ。船の上に肥料工場を乗せる、いわゆる洋上肥料製造プラントを作る。これをガス田の近くに係留して肥料を作る。そのガス田が枯渇したらすぐに次のガス田に船を移動させ、こうして小規模ガス田を渡り歩くというアイデアで、もし技術的に可能だとすると大変魅力的なアイデアだ。

新技術大好きなストオ将軍はこのアイデアに飛びつき、すぐに中古船市場に出ていたドイツの古い砕氷船を購入し、プロジェクト建設の契約を結んだ。しかし、設計段階になるとインドネシアのサイクロン（台風）が技術的な問題として浮上してきた。肥料はプラント内部で起こる化学反応によって製造される。しかし、そのプラントに台風のような現象で振動が生じると何が起こるか分からない。爆発の危険がある、とのことだ。そ

¹ このあたりの事情については、浅沼信爾・小浜裕久『途上国の旅：開発政策のナラティブ』（2013年、勁草書房）、第4章「インドネシア：「資源の呪い」を超えて」を参照されたい。

ここで、最初はこの洋上プラントを海面に浮遊させておくのではなく、海岸に強固に係留するアイデアが出された。しかし技術コンサルタントは、それでもまだ安全性は保証されないと言う。そこで今度は船を海岸に引っ張り上げていわばドックのような構築物に入れるアイデアが検討された。それでもまだ台風などの振動を抑えることができないので、最終的にはプラントの乗った船を海岸からジャングルに数キロ程引っ張り込んで完全に固定してしまおうという案が出された。こうなるともう洋上プラントなどとは呼べない代物で、なぜプラントを船に乗せるのか、ジプシー・プラントと呼べるかどうか、もう訳がわからない。

ちょうどこの段階でプルタミナはストオ将軍の放漫経営から債務返済不能となり破綻、インドネシア財務省がプルタミナの債務を肩代わりして国際銀行団と債務繰り延べ交渉をすることになった。わたくしは、それを手伝う国際金融顧問団の一員になって、プルタミナの債務とプロジェクトの整理作業をしていて、このプロジェクトに遭遇した。プロジェクトのためには当時のアメリカン・エクスプレス国際銀行（アメリカ国内では銀行業の認可はなし）から1億ドル以上の借款契約を結んでいたがこれはキャンセル。ドイツの中古砕氷船は既に購入済で、またプロジェクト準備に使った費用はすべて無駄になったし、いろんな違約金も支払わされた。

おかげで、中古の砕氷船がボルネオのジャングルの中から発見される可能性はなくなった。最近といってももう昨年になるが、イタリアのENIや中国石油天然気集団(CNPC)、韓国ガス公社はモザンビーク沖合の海底ガス田の天然ガスからLNGを作る洋上浮体型のLNGプラントを作ることになり、日揮などがその建設を受注したという記事が日経に出た（2017年6月1日朝刊）。LNGプラントでは、レンチを床上に落とすだけで、その衝撃で爆発が起こるほどセンシティブなプラント（実際スマトラ・アチェのLNGプラントでこのような爆発が起きたことがある）で、肥料工場よりはるかに振動が問題になる。そんな洋上プラントが技術的に可能になったことは、1970年代当時の技術からするとまるで夢のような進歩だ。実に感慨深いものがある。